

「〈生活に埋め込まれた〉開発現象—韓国における誕生日の陽暦化」

神戸大学国際文化学研究所 澤野 美智子

韓国において誕生日は、個人の生まれた日を祝う記念日であるのみならず、族譜に記録されることによって祖先とのつながりを把握する基準としての役割も担っている。さらには生年月日時によって個人の運命「八字 *palja*」が決まるという考えが強く、結婚に際して新郎新婦の生年月日時から二人の運命を見る「宮合 *gunghap*」をはじめとする占いが広く行なわれている(崔 2003)。このように誕生日は、個人を社会に位置づけるとともに、個人の生きかたを左右するものとして非常に重要な役割を担っている。

誕生日の日付に関して、韓国では太陰太陽暦(以下、現地の慣行に従い陰暦と呼ぶ)で把握されてきたが、近年になって太陽暦(以下、現地の慣行に従い陽暦と呼ぶ)で把握する動きが見られる。韓国全羅北道の農村部に位置する A 里においては、1970 年代前半以前に生まれた世代は陰暦で誕生日を祝う傾向が強いが、1970 年代後半から 1980 年代生まれの世代は誕生日に陰暦を用いる人と陽暦を用いる人とが混在しており、1990 年代生まれ以降の世代は陽暦で誕生日を祝う傾向が強くなっている。このような誕生日の陽暦化はどのようにして起こったのであろうか。本発表では国家主導の農村開発政策の一環として行なわれた母子保健事業に焦点を当て、開発という観点から韓国における誕生日の陽暦化について考察する。ここで特に注目するのは、「〈生活に埋め込まれた〉開発現象」(小馬 2000:166)である。本来、小馬(2000)は「大規模な開発現象」と対置される「草の根次元の零細な〈開発〉」を「〈生活に埋め込まれた〉開発現象」と曖昧な定義のまま呼んでいる。しかし本発表ではそれとは違う次元からのアプローチを試み、開発現象が〈生活に埋め込まれ〉ているとはどういうことか、議論を通じて定義しなおすこととする。

韓国では 1963 年、家族計画事業とともに母子保健事業が始まった。母子保健事業の目標は「安全な分娩管理」による産児・妊産婦の死亡率低下に置かれ、1970 年代には妊婦の登録および教育、保健所の看護補助員による分娩介助、新生児の登録が行なわれた。この過程を通して、都市の貧しい階層や農村地域の人びとも妊娠・出産に関する医学的知識に触れる機会をもつこととなり、産前の医学的管理の有用性・必要性が広く認識されるようになった。さらにはそれまで農村地域では主流であった家庭出産をも危険で不安なものとして考える傾向が 1970 年代後半以降の農村地域において強まっていった(조영미 2004:135)。1977 年に医療保険制度が整備され、1988 年に全国民医療保険制度が実施されたことも、施設分娩の増加に拍車をかけた。このように産前管理と施設分娩を強調した政策の結果、1990 年代には都市地域・農村地域にかかわらず産前受診および施設分娩がほぼ 100%の割合で行なわれるようになった(조영미 2004:142)。医療施設では陽暦が使用され、出産予定日や検診日、子どもの生まれた日などが全て陽暦の日付で説明される。農業暦など生活の中で陰

暦を活用し誕生日を陰暦で祝ってきた農村地域の人びとに対しても、母子保健事業という開発政策が推し進められる中で陽暦が押しつけられていった。

ただし人びとがそれをすんなりと受け入れたわけではない。1970年代後半から1980年代生まれの世代は誕生日に陰暦を用いる人と陽暦を用いる人とが混在しているが、住民登録は陽暦の誕生日で届けてあるが実際は陰暦の誕生日で祝っていたり、家では陰暦で祝うが友達とは陽暦で誕生日を祝っていたりと、複雑な実践がなされているケースも多い。出産をめぐる大きな変化を経験した時期に生まれた世代が陰暦・陽暦というダブルスタンダードの狭間でこのように複雑な実践を繰り返していることは、当時の出産と誕生日のありかたをめぐる人びとの意識変化がいかに急激で混乱に満ちたものであったかを物語っている。しかし1970年代に生まれた世代が成人して1990年代に子どもを産むと、大部分が子どもの誕生日に陽暦を選択し、子どもたちは当然のごとく陽暦の日付を自分の誕生日として認識するようになる。開発政策によって妊娠・出産の場に押しつけられた陽暦を、個人が陽暦の誕生日として取り込み、内面化して主体的に実践するようになる過程をここに見ることができる。

すなわち「〈生活に埋め込まれた〉開発現象」とは、開発の過程で開発する側からもたらされたものを、開発される側が内面化し主体的に実践してゆく現象であると再定義することができる。開発現象を見ようとするとき、このような「〈生活に埋め込まれた〉開発現象」を含めて見ないことには、その全体像を見ることはできない。韓国においては、誕生日の変化は個人を社会に位置づける根本的な基盤のゆらぎをも意味する。母子保健事業という開発現象は〈生活に埋め込まれ〉てゆくなかで、妊娠・出産に関わる状況を変化させるのみならず、個人と祖先とのつながりのありかたや、それを支えてきた儒教的基盤にさえも変化をもたらすこととなったのである。

参考文献：

足立明、2003、「開発現象と人類学」、米山俊直編、『現代人類学を学ぶ人のために』、世界思想社。

小馬徹、2000、「キプシギスの女性自助組合運動と女性婚」、青柳まちこ編、『開発の文化人類学』、古今書店。

崔吉城、2003、「占い」、伊藤亜人ほか編、『朝鮮を知る事典』、平凡社、pp.16-17。

松岡悦子・日隈ふみ子・菅沼ひろ子、2007、「韓国におけるリプロダクションの変遷」、『旭川医科大学紀要 一般教育』23、pp.71-85。

조영미, 2004, “출산의 의료화 과정과 여성의 재생산권(reproductive rights)에 관한 연구”, 이화여자대학교 박사학위논문.